

これまでは動詞について見てきたが、今回は少し視点を変えて「やまい」についてみていきたい。まずは、それが意味するところを大まかに記しておこう。

「やまい」とは何か。それは「神の立腹」(一号 25、32)、「神の急ぎ込み」(二号 7、11、三号 103)、「神の手びき」(二号 7)、「神の道教え」(三号 138)、「神の意見」(三号 138)、「神の用向き」(四号 25)、「神のする事」(六号 22、十四号 20)、「神の手入れ」(十号 68、十四号 21)、「親(神)の残念」(十四号 77)と表現される。

次に、「やまい」はなぜ起こるのか。それは、「いかなやまいも心から」(一号 24)であり、「心ちがいの道があるから」(三号 95)である。さらに詳しく言うなら、「この世はじまり」を知らないからであり(三号 93、九号 10)、「神の自由自在の働きを知らしたいから」(十一号 26)でもある。

それでは「やまい」はどうすればたすかるのか。それは、「心次第に治らんでなし」(五号 13)、「真実の「息(のさづけ)」と「ておどり」でたすける」(六号 108、十二号 50)、「つとめ一条でみなたすかる」(四号 94、十号 20)。そして、どんな「やまい」であっても、そのたすかりは親神が確かに請け合っていると記されている(九号 9、34)。

それでは、文脈にそくしていくつかみていこう。まず、四号では、次のように、「やまい」の症状も細かに記されている。

これをみよせかいもうちもへたてない
むねのうちよりそふぢするぞや (四号 108)
このそふぢむつかし事であるけれど
やまいとゆうわないとゆてをく (四号 109)
どのよふないたまなやみもでけものや
ねつもくだりもみなほこりやで (四号 110)

「痛み」「悩み」「できもの」「熱」「くだり」といった症状に対して、世間一般にいわれているようなただ単なる「やまい」として捉えるのではなく、「ほこり」の現れとして捉えるように論されている。つまり、それらの症状が現れてくる目的は「むねのうちよりそうじする」ためである。このことは、五号でも次のように記されている。

せかいぢうどこのものとハゆはんでな
心のほこりみにさハリつく (五号 9)
みのうちのなやむ事をばしやんして
神にもたれる心しやんせ (五号 10)

ここでは「やまい」という語句は使われておらず、「身の内の悩む事」として表現されており、「心のほこり」によって「身に障り」がつくと説かれている。そうした事態において、「神にもたれる心」が求められている。そして、次のように「心のほこり」も明確に歌われている。

なにゝてもやまいとゆうてさらになし
心ちがいのみちがあるから (三号 95)
このみちハをしいほしいとかはいと
よくとこふまんこれがほこりや (三号 96)

ところで、上記のように、「やまい」は「神の立腹」などの現れであり、ただ単なる「やまい」ではないことが繰り返し論されている。

やまいとてせかいなみでないほどに
神のりいふくいまぞあらハす (一号 25)
なにゝてもやまいいたみハさらになし
神のせきこみてびきなるそや (二号 7)

「痛み」というのも、「やまい」の症状の一つではあるが、ここでは、それをただ単に「痛み」とだけ捉えるのではないことが示されている。「やまい」の起因の一つは、人間の「心のほこり」であり、また一つはそれを「そうじ」しようとする親神からの働きかけである。次の歌は、その神と人との心の相関関係を示している。

これから八月日の心ざんねんを
はらすもよふばかりするそや (六号 75)
このさきほどのよなほこりたつとでも
これをやまいとさらにをもうな (六号 76)
いまゝでも月日さんねん山へに
つもりであるをかやしするぞや (六号 77)

ここでは、一般に「やまい」と捉えられ得るような身体の不調が「心のほこり」の立った姿であると同時に、「月日の残念」の「かやし」であると告げられている。そして、次のように「かやし」によって、「むねのそうじ」を進めていくことが歌われている。

このたびのざねんとゆうわしんからや
これをはらすもよふないかよ (十六号 14)
このことを神がしいかりひきうける
どんなかやしもするとをもゑよ (十六号 15)
このかやしみへたるならばどこまでも
むねのそふぢがひとりだけでけるで (十六号 16)

そして、次のように、一般に「やまい」と捉えられている症状に対して、これまでは「医者」や「薬」を施してきたが、それらを「心のほこり」の現れとして捉えて、そこに込められた神意を汲み取るようにと論されている。

いまゝでハやまいとゆへばいしやくするり
みなしんぱいをしたるなれども (六号 105)
これからハいたみなやみもてきものも
いきてをどりてみなたすけるで (六号 106)
このたすけいまゝでしらぬ事なれど
これからさきハためしゝてみよ (六号 107)
どのよふなむつかしきなるやまいでも
しんぢつなるのいきでたすける (六号 108)
月日よりしんぢつ心みさためて
いかなしゆこふもするとをもゑよ (六号 109)
むまれこふほふそはしかもせんよふに
やますしなすにくらす事なら (六号 110)
しかときけいかなぢうよふするととも
月日の心ばかりなるぞや (六号 111)

「痛み」「悩み」「できもの」も、「どんな難しいやまい」も、「生まれ子の疱瘡や麻疹」でも、親神が「人間の真実の心を見定めて、いかな守護もする」(109)と歌い、そうした守護をみせるのも「月日の心」からであると説かれている。